

大阪

あんなとこ
こんなとこ

『天満』

日本三大祭のひとつに数えられる天神祭は、6月下旬の装束賜式しょうそくたはりしきから約一ヶ月間、大阪天満宮を中心に様々な神事が執り行われます。大阪天満宮は、天満の天神さんと呼ばれ人々に親しまれています。今回は、天満について調べてみました。

天満青物市場

上町台地の北西、大川の北に位置する天満の地名は、菅原道真公を祭神とする天満宮に由来しています。この地は、大阪天満宮や大川沿いにあった天満青物市場により繁栄しました。

天満青物市場の起こりは、石山本願寺の門前に自然発生的に出来た野市だと言われています。この市は、豊臣秀吉が石山本願寺跡に大坂城を築城した頃から二転三転し、天満へ移転。大川に面する水運の便により、大阪三郷周辺各地から青果物（果物・野菜）が沢山集まり、発展したといわれています。貞享2年（1685）頃には54軒の間屋を有し、安永元年（1772）には株仲間の開設を公認され、堂島の米市場や雑喉場の魚市場と並び青果物の取り扱いを独占しました。その後、昭和6年（1931）福島区に中央卸売市場が開場するまでの永きにわたり、天満青物市場は、青果物の流通拠点として大きな役割を果たし続けました。

ガラス発祥の地

大阪天満宮のえびす門脇に「大阪ガラス発祥之地」の石碑を見つけました。天満宮界隈は、昭和の初期頃まで、沢山のガラス工場が集まり、日本のガラス産業屈指の地域だったそうです。

天満にガラス職人が誕生したのは宝暦年間（1751年頃）と石碑に書かれています。長崎の商人である播磨屋清兵衛がオランダ人からガラス製法を学び、天満天神鳥居前に玉屋を開業。珍しい色のガラス玉細工を始めたのが大阪のガラス工業の始まりと言われています。

また、日本で初めて魔法瓶を生産したのも大阪だったそうです。当時の大阪は、日本のガラス工業の中心であり、電球の生産に必要な真空技術を生かして開発された魔法瓶の中ピンを製造する企業が多く創業しました。その後、第一次世界大戦の勃発と共に、魔法瓶の需要が飛躍



天満宮えびす門脇に建つ大阪
ガラス発祥之地の石碑

的に拡大すると国内生産量の90%を輸出していたといえます。現在でも国内の魔法瓶のメーカーは、大阪地区の企業が多いそうです。

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞